

## 徳島県近世社寺建築の調査

建造物研究室

徳島県教育委員会から近世社寺建築緊急調査の委託を受けて、平成元年度に徳島県下の全市町村で151件の社寺を調査した。平成二年三月に徳島県教育委員会から調査報告書を刊行した。

徳島県は江戸時代を通じて阿波一国であったが、吉野川流域や四国山脈を境として文化圏をつくり、吉野川流域を北方といい、四国山地から南を南方といって二分するが、文化圏の違いが建築に明瞭には反映していない。吉野川の氾濫はすさまじく、氾濫の影響があった所では18世紀末期以前に遡る遺構が、また東海岸では津波の災害で江戸時代中期以前に遡る建物がないと言ってよい。全体として徳島県では江戸時代中期以前の建物は23棟と少ない。

現在の徳島県下の寺院を宗教法人名簿によって宗派別にみると、真言宗419、真宗87、禅宗48である。高野山真言宗が230寺と圧倒的に多く、ついで真言宗大覚寺派81寺、真言宗御室派78寺が多い。真言宗各派の分布には特徴があり、高野山真言宗は吉野川中流から西は皆無に近く、美馬郡では木屋平村のみに3寺院があるが三好郡はない。一方真言宗御室派は、吉野川中流から西の美馬郡三好郡に多く、また東海岸の北よりに散在する。四国八十八ヶ所札所のうち県下には23寺があり、それらが属する宗派は高野山真言宗が多いが、徳島市国分寺と鴨島町藤井寺のように曹洞宗に属する寺もある。

仏堂の規模・建立年代をみると、調査した46棟のうち三間堂が40棟と大半を占め、五間堂あるいは五間堂規模の仏堂には、徳島市観音寺（延享二：1745）・鳴門市品住寺（正徳二：1712）・吉野町延寿寺（天保十二：1841）・美馬町西教寺（安政五：1858）・三好町教法寺（18世紀前期）の5棟しかなく、後三者は浄土真宗に属する。池田町箸蔵寺観音堂は三間堂ながらやや大柄の本格的な仏堂で17世紀中期に遡る。徳島市国分寺本堂や海部町法華寺祖師堂のような大型で妻入の本堂が江戸時代後期に造営されていて、精彩を放っている。禅宗系寺院は少なく、鳴門市にある曹洞宗光勝院本堂は典型的な方丈型式であり延宝四年（1676）と古い。また、室町時代の将軍家の後裔が居住した平島公方から移築したという小松島市地藏寺方丈が大型で見応えがあるが、改造が大きいのが惜しまれる。

県下に5基ある多宝塔のうち、土成町熊谷寺の多宝塔は安永三年（1774）の建立で、これを除く4基は江戸時代末期から明治時代中頃にかけたの建立である。この時期に多宝塔の造営が一つの流行となった様相を示している。山川町明王院の二重堂は多宝塔のくずれた形と考えればこの流行の終末期の造営である。層塔は勝浦町鶴林寺の三重塔（文政十一：1828）1基しかなく、貴重である。

美馬町安楽寺の山門は三間三戸の二重門で、宝暦元年（1756）の建立であり、下層の組物は斗を用いず二手先を置くという他に例をみない手法を用いる。ただし、上層は本格的な禅宗様三手先であるから奇抜さを狙ったと考えられよう。

「寛保御改神社帳」（1740年代）によれば県下には神社が1236社あったが、現在は1034社で、

明治時代以降に合祀によって減少したのであろう。

神社の本殿形式では流造が多く43棟あり、一間社が30棟、三間社が13棟である。三間社では徳島市一宮神社・鳴門市宇志比古神社・貞光町熊野十二社神社が17世紀の遺構で、このうち宇志比古神社本殿は17世紀初期に遡る。一間社では鶴林寺鎮守堂・上勝町福川八幡神社・一字村新田神社・東祖谷山村三所神社が17世紀の遺構で、このうち新田神社は寛文年間の建立である。春日造は江戸時代末期の社殿4棟を調査したに留まり、地域的分布の特徴をみることはできない。春日造のなかでは貞光町松尾神社が大型で文化二年（1805）の棟札を持ち、年代が確定し貴重である。春日造・流造以外では切妻造一間社社殿が2棟あり、穴喰町八坂神社末社祇園社はやや大きい切妻造社殿で17世紀にはいるものの大改造を受けている。徳島市天石門別矢倉比売神社の社殿は神明造で珍しく宝暦二年（1752）の棟札を持つが、建立年代はもっと下るものと考えられる。入母屋造社殿は県下に6棟あり、うち5棟が三間社であり、いずれも江戸時代後期の建立である。池田町医家神社が文化三年（1806）の棟札を持ち入母屋造社殿の中では古い。一間社の入母屋造社殿は井川町八幡神社本殿で17世紀の遺構である。吉野川の中流・上流で江戸時代中期以前に建立された本殿には、やや稚拙な感じさえする頭をもちあげた龍頭を向拝木鼻とし、龍頭の上に斗を置いて連三斗を受けるものが多い。頭をもちあげた龍頭は、時代が下ると写実的な彫りになり、19世紀前期まで続く。

昭和48年度の民家緊急調査では徳島県下の民家に多くの棟札が所蔵されていることが知られた。今回の近世社寺建築調査では、神社では多くの棟札を有するものがあったが、寺院では棟札を発見できなかったものが多い。棟札の形状は通常の尖頭形が多いが、貞光町児宮神社に長さ1656～1698mm、巾87～96mmで、ほっそりした長目の棟札五枚がある。明応五年（1496）・弘治二年（1556）・慶長六年（1601）・寛永廿一年（1644）の年紀があり、後の二枚は前身の形状を受け継いだと思われ、この形状の棟札は中世に限られるかもしれない。注目される大工は木沢村出身の湯浅岩蔵で、彼が造営に関与した作品として那賀川流域を中心に相生町辺川神社（文政十一：1828）・海南町轟神社（安政七：1860）・木頭村端傳寺本堂（文政四：1821）がある。彫刻を多用するが、全体の意匠は派手にならず本格的な造営をしている。（上野邦一）